ときめき きらめき いきいきを伝える

広報

Seki

せき

2018
6
No.1688

関市イメージキャラクター
「関＊はもみん」

特集

今、私たちができること

～高齢化社会と向き合うために～

TOPICS

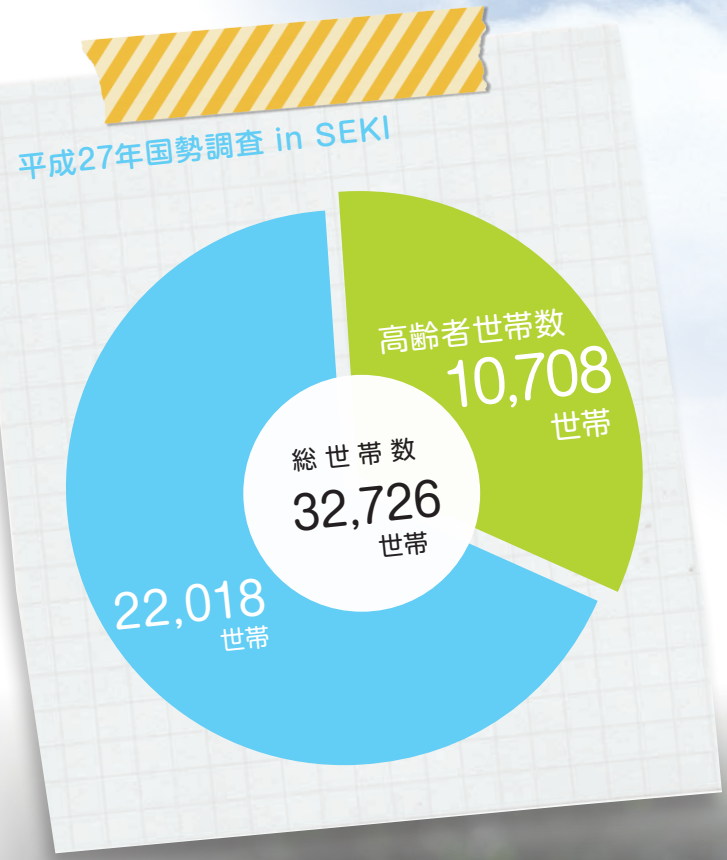
・せきのまちづくり通信簿結果発表…P6~8
・お知らせ…P26~32
・文化会館／図書館…P33
・しあわせヘルスだより…P34~35

今、私たちができること

～高齢化社会と向き合うために～

人は誰でも年をとります。日本が高齢化社会を迎え、核家族世帯の増加にも拍車がかかり、多くの高齢者が社会から孤立する不安を抱えています。

ここ関市でも、全32，726世帯（平成27年国勢調査）のうち、高齢者世帯数が30％以上を占める中、地域や社会とのつながりを保つための取り組みが増えてきました。住民同士が、「気にする・気にかける」という関係性を深め、高齢者の不安を和らげることが、これからの地域社会に求められています。



～ちょっと友達の家に行く気分～

事例1 田原みんなのおうち

昨年4月、気軽に集まって交流を深める場所として、月1回田原地区の一人暮らしの高齢者の家に集まって、介護に関する相談やおしゃべりをする、「田原みんなのおうち」が始まりました。

60代後半から80代の高齢者を主体とし、地区内の介護施設からの利用者も多く、健康・仲間・生きがいづくりにつながっています。地域の福祉関係者、中部学院大学のスタッフの協力のもと、1年間で約200名の方が参加しました。

実際のお家を活用させてもらっているので、公民館とはまた違う、家の雰囲気を感じることができるのが醍醐味ですね。居住者の女性も、前日は張り切って掃除をして、月1回みんなが家に"寄る"ことを楽しみにしています。参加者さんの様子も分かるので、広い意味での見守りになっていると思います。

佐藤 正和さん
（田原みらいづくり協議会代表）

～キーワードは安心～

事例2 人感センサーを活用した見守りサービス（板取地区）

見守りのために、人感センサー機器を活用している世帯が板取地域にあると聞き、話を伺いました。

母親を見守ろうと、センサーを導入した長屋厚子さんは、「起きたり、寝たりといった生活のパターンが分かるので、安心できますね。」と教えてくれました。

母親の長屋ちゑさんは、「やっぱり、娘が見守ってくれていると思うと安心しますね。」と、娘の厚子さんと同じように"安心感"を伝えてくれました。

リビングをはじめ、生活エリアに設置できるので、家族が高齢者の日常生活の動きを簡単に把握できる上、監視カメラとは異なり、カメラを意識することなく生活できるのが特徴です。

地域福祉の今とこれから

福祉委員から、サロンのボランティアへ

各地域の公民館などを利用し、生きがい・仲間づくり・閉じこもり防止などを目的に、高齢者の交流の場として、月に1回程度サロンを開催しており、各地区の民生委員、福祉委員、ボランティアの皆さんの協力で運営されています。瀬尻支部のふれあいサロンに携わってこられた2人が任期を終えてもなお、ボランティアの立場からサロンの運営に協力されています。

“いつもありがとうね”の言葉がボランティア冥利に尽きます

年を重ねるとともに、体力的にきついと感じることも多くなってきたので、自分のできる範囲で地域福祉に関わっていきたいという思いから、サロンのボランティアになりました。

後藤 肇さん

義母がサロンのお世話になっていたこともあって、生活の合間に私で良かったらとの思いから、引き受けることにしました。

ここに来ると、知り合いのおばあちゃんやボランティアの仲間など、色んな人に会えるから楽しいです。サロンでお友達になって、親しくさせてもらっている方もいらっしゃいます。ボランティアというより、自分が来たいからやっている!!という感覚です。

助川 津津美さん

福祉委員ってどんな仕事？

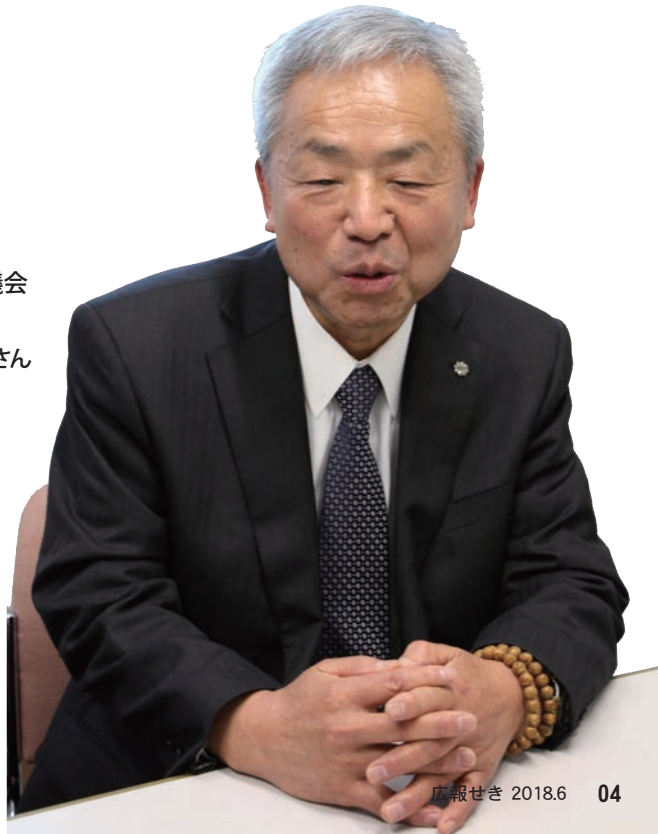
社会福祉協議会から委嘱を受け、2年の任期でおおむね自治会に1名設置し、地域福祉活動を推進する役割を担っています。民生委員と活動内容や活動対象者に違いはなく、互い協力し合い地域の困りごとに向き合っていて、主に見守り活動を基本に、サロンの活動や配食サービスに関わっています。

人とのつながりは煩わしい時もありますが、続けていくうちに喜びを感じるようになると思います。

地域福祉の主人公は住民なので、助けを必要としている人も、誰かのために働きたい人も、地域に飛び出してほしいです。地域での人と人との「つながり」と「優しさ」が、地域福祉の原点になるからね。

社会福祉協議会（以下、社協）は、長い間地域福祉に関わることのできる専門職の集まりなので、信頼関係を築いて寄り添いながら、個々の思いを受け止めていきます。

「地域福祉」と言うと、何か難しい言葉に聞こえるかもしれませんが、地域で活躍している皆さんは、自分のできる範囲でできることをやっています。構えずに、地域に出ていく「入口」だと思って、気軽に社協の活動に関わっていただけると嬉しいです。



社会福祉協議会
会長
澤井 基光さん

ゆるく、なが～いお付き合い

ー倉知地区の鵜飼さんと、サポーターの井本さんの場合ー

井本 まり子さん：月に2回、ごみ出しの前日にご自宅にお邪魔して、ごみを集めます。障がいのある子どもの面倒を見ながら、サポーターのボランティアを行っているので、生活の合間にできる範囲で行っています。子どもを育てる中で、私自身が多くの方に支えてもらっていると感じたので、恩返しの気持ちでサポーターに登録しました。最初は忘れてしまうこともありましたが、ここまで続いているのは、“やらないと”という義務感より、鵜飼さんに会える楽しみがあるからでしょうね。（下写真：左）

鵜飼榮さん：年とともに足腰が弱くなってきて、ごみ出しは大変です。でも、このサービスが始まって、とても助かっています。井本さんには、本当に感謝していますよ。（下写真:右）

ほっと安心サービス

昨年4月から始まった、日常のちょっとした困りごとを抱える方（会員）を地域のボランティア（ほっと安心サポーター）がお手伝いをするサービス。内容はゴミ出し、電球交換、草引き、灯油給油の4項目で、月に2回30分以内の範囲で利用可能。現在の会員数は約80名、サポーターは170名程度。

月に1回、手作りのお弁当を一人暮らしの高齢者宅へ持っていく配食サービスに、桜ケ丘小の児童が手紙、学校で育てた花、運動会の招待状を持って一緒に訪問しています。高齢者は子どもの訪問を心待ちにしていて、子どもたちも地域で暮らす人と接する良い機会になっています。

（桜ケ丘支部長 早川敏文さん）

見守りネットワーク活動

全支部社協で行っている、安否確認・ニーズ把握・地域とのつながりを目的とした活動で、月に1回程度一人暮らしの高齢者の様子を、自宅訪問・電話・サロンへの参加や畑仕事をする姿を見かけたなどの方法で確認。高齢者が孤立することなく、地域で誰かとつながる関係づくりを図る。

高齢者の見守りが、世代を超えた交流の場に